

長谷川慶太郎著「大統領が変わると日本はどこまで変わるのか」

ソニー・マガジズ、テレビズ新書 2008年11月15日刊を読む

大不況下の日本の可能性

1. 世界の大規模なインフラ整備に日本の機械工業が果たす役割の大きさには計り知れないものがある。

(1) もちろんそれはエネルギー分野にとどまらず、たとえば各種原材料の供給基盤を確保する採掘や建設現場で活躍する建設機械、高速化・大容量化が進む国際輸送の場面での動力源としての大型ガスタービンや筐きょうたい体素材としての炭素繊維開発など、まさに枚挙にいとまがないほどだ。

(2) 地球規模で計画され、現在、本格的に着手されようとしている大型インフラ投資の主役となるのは、間違いなく日本の機械工業なのである。 P91

2. (1) もはや日本とアメリカの補完関係は、決して分けることができないところにまできている。アメリカが世界の超大国であり続けるためには、日本を抜きにしては考えられないのである。

(2) 産業経済の基盤は日本にある。原子力や石油、天然ガスなどのエネルギー・インフラ、先端技術を発揮するために欠かせない材料・部品、精密工作機械などを、自ら作ることを放棄してしまったのがアメリカなのだ。この状態は、もはや好き嫌いの段階ではなく、いかんともしがたい現実であり、強固に完成された構造といってもいい。

(3) 20世紀後半のほぼ半世紀という時間をかけて作り上げられてきた、この非常に効率的で理想的な補完関係こそ、現在、そして今後の世界の仕組みをリードしていくものにほかならないのである。 P201

[コメント]

大不況下であっても、日本の可能性、果たすべき役割は極めて大きい。そのことを長谷川慶太郎氏は強く主張している。

- 2009年2月28日林明夫記 -